

語り物「雨」
〈歌詞〉

原作 井上ひさし／脚色 海津勝一郎／作曲 今藤政太郎

時 江戸末期

場所 江戸・山形への道中・山形

登場人物 古金屋の徳・おたか・夜鷹のお花・見知らぬ男
山形藩家老某・若侍・村人・紅屋使用人

徳 「ふるかねえ／＼ かなもののお払い。あつ 又降つて来やがった。

「雨の降る夜の独り寝は、銭がない銭がないのとくらア
あつしよのない天気だなア」

お花 「あつ仕様のない人だねー。これき橋の下に寝てちや風邪ひくよ、夜鷹のお花が達
引きさ、浅草の米饅頭をお喰べでないか。チヨイと徳さん 古金屋さん。」

見知らぬ男 「イヤびつくり仰天似ている、ん、違くない。もし橋の下のお方 イヤ旦那様／＼
貴方様もしや…紅屋の喜左エ門様じゃございませんか。」

徳 「何だ 俺は徳だよ。」

見知らぬ男 「去年の秋に天狗隠して消えておしまいになった山形の紅花問屋の旦那様。」

徳 「うるせえなあ。俺やあこれ旦那様だった事もなければこれから先旦那様なる当
てもねえ古金屋の徳だよ。」

お花 「そうだよ徳さんだよ。」

見知らぬ男 「山形じゃ美しい奥様のおたか様はじめ、村の衆やお役人方までお帰りを待つてお
いででございますよ。」

徳 「さあさ、そんな事より一稼ぎ、古金／＼。」

見知らぬ男 「おかくしになつたつて…わけあつてのことでしょうが、はるか離れた江戸で古金
屋になつてゐるなんて…。」

徳 「よしてくれよ。」

見知らぬ男 「旦那様。」

徳 「いい加減にしてくれ。」

見知らぬ男 「旦那様。」

徳 「放してくれ。」

見知らぬ男 「旦那様。」

徳 「うるせえな。」

見知らぬ男 「旦那様くくく。」

徳 「うるせえくく、うるせえ……ふん？」

お花 「おや徳さん何処へ、ちよいとお待ちよ、妙な人だね、それにしてもよく降るねえ。」

徳 「桜が南から北へ順々に咲くのを追いかけて、江戸から宇都宮、白河福島、米沢から、山形へ行く先々は雨ばかりだ。満開の桜と雨は変わらねえが、言葉だけはくるくく変りやあがる。」

小皿がコジヤラで、痣がアジヤ、混ざるがマジヤルで箆がジヤル、簪カンジヤシ、産はゴジヤ、数えるカジヨエル、サヅマエモ……峠の茶ばあがべらつえべえ、あぐとさどろつば、ハーカラみえねぐなつちまつたば、

これじゃ一生かかったって紅屋の喜左にはなりやしねえ、帰ろくお江戸へ帰ろ

……イヤ……おたか、おたかつと云ったな、いい名前だ、なめえおたか、おたか。

村人「喜左衛門様あ！くくく喜左衛門様が事無しで戻らえだ。」

家人「天狗ささらわれだ旦那様が、旦那様くく。」

おたか「あんだ！えがったし、よく戻ってござった、えがったし。」

徳「おたか。」

おたか「えがったし。」

徳「おたか。」

おたか「えがったしくくくくくくくく。」

へアリヤサ コリヤサのベニバナクドキ それくくくくくくくく。」

へ羽前山形その名も高い。紅屋喜左衛門有徳な者よ 紅花一手に扱いました、店も

賑やか暮しも繁盛、ソレくくくくくくくく。」

家老「何と喜左衛門が戻りしとな。はて目出度きこと、あの者なくしては山形藩が立ち

ゆかぬわ、殿様もさぞお喜びであろう。」

へアリヤサ、コリヤサノベニバナクドキ、ソレくくくくくくくく。」

へ家つきあね様おたかと云うて、婿を大事に花なら牡丹、目元涼しく母様ゆずり、

声の良いのは父様ゆずりソレくくくくくくくく。」

おたか「あんだ、憶えあつべか、この浴衣盆の踊りの夜の更けに、紅花畠の真中で、はじ

めて肌ば合わせだどき着ていたもんはこの浴衣、何年前になつpegな。」

徳 「四、五……六……。」

おたか 「何云ってんす、天狗さ脳みそ抜かれたんだべ、八年になつこつたつたよ、さあ、えづものようにすて。」

徳 「こうか。」

おたか 「んね。」

徳 「こうか。」

おたか 「んねえ。」

徳 「こうか。」

おたか 「あつ、いいごでし、あんだ、かんにんしておごやえ……。」

徳 「おたかは、とびきり良い女房、見渡すかぎりの紅花島、これがみんなおれの物、おたか 苦勞のしがいがあつたことよ。」

お花 「もし、徳さん、久しいねえ、お前さん言葉にやお気をつけよ。」

徳 「俺ら紅屋喜左衛門、徳なんて御仁はしやね。」

お花 「夜鷹のお花さ、橋の下をお忘れか。」

徳 「シート、大きな声を出すねえ雨蛙がびっくりするぜ。」

お花 「お前でつかい山をお当てだねえ、それに引きかえ江戸の連中は橋の下、お前一人

が橋の上ネ私も傘に入れておくれな。」

徳 「おーさあ、相合傘で帰ろうか。」

お花 「あ嬉しいねえ、千両箱が拜めるかい。」

徳 「そうとも、手つけにや小判二百両これでも搦んで……。」

お花 「ええ……あ、お前私をどうする気だい。」

徳 「せっかく搦んだ紅屋の身代、お前が生きめえてちや困るのさ。死んでくれ。」

お花 「ああ人殺し。」

徳 「地獄へ行け。」

お花 「畜生……。」

若侍 「シーツ御家老様御出座。」

家老 「喜左衛門夫婦、承れ、去年、われらとそちがたくらみ、幕府からの負担金一万両を、紅花不作と偽りてまぬがれし一件、幕府隠密の知るところとなる。これ即ちお家の大事、殿様のお命にもかかわること、喜左衛門、そなた一人罪を背負って死んでくれい。」

徳 「ええっ、ち、ちがう、俺あ喜左衛門でねえ。」

おたか 「この期さ及んで見苦しいこと、紅屋五代目すつかと性根ば据えでくなえ。」

徳 「俺あ紅屋でねえんだから。」

家老 「黙れ紅屋、その山形なまりが何よりの証拠。」

徳 「そりやア命がけて稽古ばして……俺あ江戸の古金屋の徳でござえます。」

家老 「ならば生き証人がいるか、やい。」

徳 「その証人は、夜鷹の……。」

家老 「何と。」

徳 「夜たか……あ、おたか、女房のおたか、俺が偽物だとわかっているな、な、な、えづものようにはいかなかったなし！なし！」

おたか 「んね、えづものようであつたしあんでは紅屋喜左衛門、おらの御亭でございませす。」

家老 「さあ何と、さあくくくくくくくくくく。」

徳 「ま、ま、まままま待つてくれ、待つてくれ、両国の橋の下できいてくれ、比丘尼、夜鷹や、かんかんのうのう鉢叩き、誰でもかかれても知ってるよ、見世物小屋のろくろつ首、はだし裸の代参り、ちよろりんどじよ坊おなまみだん仏、つれ三味合い唄、おいとこそうだよ、いっちくたつちく、いっちくたつちくたいもんさん、願人坊主が……アアアあつ助けてくれ、俺あ古金屋の徳さんだ。古金えくくか、な、も、の、の、おはらい……。」

おたか 「あんでは徳と云つて居だつたね、似ていたのが災難でございした、御家老様のは

からいで本物の喜左さんは隠れて生きて居ったよ、あの人が死んではこの山形が立ちえがね。それであんだを……。胸の底さあんだのごどは一生刻みつけておく。あんだはおれの御亭ごてにはちげえねかったもの。喜左衛門さあ……。徳さあ……。」